# グローバル通信

2015/10/23

**NO.23**

## 新モンゴル高校創立１５周年記念式典参列および協定覚書締結

グローバル通信第 3,4,17,21 号の各記事にあるように，新モンゴル高校とは 2014 年 3 月から数学科を中心に，新モンゴル高校への教員訪問，共同論文作成など両校間での交流を続けてきました。この度，新モンゴル高校の創立 15 周年記念式典への招待をうけ，海城より学校代表として平山と春田の 2 名が，10 月 3 日から 6 日までの式典関連行事に参列しました。また，両校間で学術的，教育的，文化的協力関係を正式に結ぶこととなり，今回の訪問中に覚書署名式が行われました。

１．モンゴルへ

10 月 2 日午後成田空港を出発して 5 時間 30 分でウランバートルに到着しました。(時差－ 1 時間)空港では新モンゴル学園の先生方の出迎えうけ，80 名程の日本からの招待客はバスに分乗してホテルへと向かいました。空港を出るとわずかに草の匂い，市内までの道沿いに建ち並ぶゲルからは煙があがり，草原の国モンゴルに来たことを感じました。一転，市内に入ると仕事帰りの車で道路は渋滞し，町並みは排気ガスで霞んで見えました。

２．訪問者交流会

３日から公式行事が始まります。午前は新モンゴル高校での訪問者交流会です。学校に到着すると，入口から会場となる講堂まで在校生が通路の両側に立ち，拍手と「ようこそ」の声の大歓迎をうけました。交流会はガルバドラッハ理事長の挨拶から始まり，日本から招待された人たちがグループ別に紹介されました。

ここで，新モンゴル高校設立の経緯について書きます。1995 年にガルバドラッハ先生は家族 5 人と共に山形大学留学生として来日し，その後は東北大学大学院で学びます。アルバイトもしながら「国づくりは人づくり」との思いで，モンゴルで新しい学校を作るとの夢の実現を目指します。これに賛同した山形，仙台の人々が集まり，柱一本だけでも支援したいとの思いで「柱一本の会」が設立され，資金面での援助活動を始めます。支援の輪は 300 人にもなり，ついに 2000 年 10 月に日本式教育を取り入れた新モンゴル高等学校が開校します。2004 年に中学校，2008 年に小学校が開校し小中高一貫校なり，2014 年には工科大学，高等専門学校も開校しました。現在の在校生は 1361 名，全卒業生 1475 名のうち海外留学生は 453 名(その内日本へは 301 名)，モンゴルを代表する高校に発展しました。基本理念を「国の真の発展は，教養の高い国民がいてこそ進むものであり，教養の高い国民の育成は教育によって達成できる」としています。

招待者の半数は山形と仙台で学校開設の支援をしてきた人たちです。さらに，奨学金財団，ロータリークラブ，留学先の大学など，新モンゴル高校を支援してきたグループが，感謝の言葉とともに紹介されました。

在校生の馬頭琴の演奏や卒業生の歌が披露された後，海城との覚書署名式になりました。あらかじめ両校で合意された覚書書面に，ナランバヤル校長と柴田校長代理として平山が署名し，無事協定締結ができました。協定を結ぶことになる経過を説明する



中で，数学科主任の川崎教諭が精力的に交流の橋渡しを努め，共同論文完成に至ったことについて触れましたが，ナラン校長からも大きな謝辞が表されました。

その後，数名ずつのグループに分かれ，授業および校内見学をしました。グループには在校生が一人か二人つき，日本語で案内をうけました。私たちのグループは 11 年生(高２)の日本語の授業に参加しました。日本語は必修科目で中学から学習を始めるので，11 年生は読み書きともかなりのレベルになっています。この日は各班に一人ずつ日本人ゲストが入り，生徒たちは用意しておいたモンゴルについてのクイズを他の班のゲストに出題，出題されたゲストが班の生徒たちに聞きながら答えるという授業形式でした。日本語，日本のこと，学習方法のことなど，新しい事柄を知ることを喜び楽しむ姿がとても印象に残りました。

校内は小学生の教室や建物続きで大学・高専の研究室もあり，海城の校舎のイメージとは異なっています。廊下の壁には卒業生全員の名前が掲示され，活躍する卒業生や生徒，学校へ協力援助をする人たちの写真が多く飾られていました。図書館には日本の漫画の書棚があり，シリーズ全巻そろっているものもあります。案内役の女子生徒も日本の漫画をよく知っていて，楽しく面白いし日本語を覚えるのに役立つと言っていました。

３．演説フォーラム

午後は場所を市内のコンベンションセンターに移して，卒業生による演説フォーラムが開催されました。卒業生の代表 5 名が，実現してきた夢や新しいアイディア，新モンゴル高校で得られたこと等，今までの自らの経験を通したメッセージを在校生や卒業生に送りました。1 期生のバドザヤーさんは千葉大工学部・大学院修士課程，東京大学大学院博士課程を経てハーバード大学で研究中です。研究テーマを決めるきっかけは新モンゴル高校の時だったそうです。どの発表でも，新モンゴル高校への感謝・愛着・誇りが話され，後輩たちに熱いエールが送られました。

４．テレルジ国立公園

式典合間の 4 日は，モンゴルの雄大な自然を体験するため，ウランバートル近郊のテレルジ国立公園に向いました。まず始めに見学したのは，チンギス・ハーン像テーマパークです。草原の丘に高さ 30m で銀色に輝くスチール製の巨大な像が建てられています。この土地は，チンギス・ハーンが 1179 年戦争に出る時に鞭を拾った縁起がよい場所だそうです。大草原の中の人工的で巨大な像は違和感があるのですが，首都から程よい距離にある地域であり，観光にも力を入れ始めています。草原は紅葉の時期を迎え，広い草原は短い草だけですが，周囲の山の上部にある樹木がモミジのような紅ではなく，黄色に色づいていました。その後，宿泊地となるゲルホテルに到着しました。日本に留学生を送り出している保護者の数組も合流し，受け入れ大学関係者との交流もされました。夕食には当日朝用意され手間をかけて調理された羊肉の料理が振舞われました。モンゴルでの最高の「おもてなし」だそうです。

５．記念式典

メインの記念式典は 5 日 14 時から，市中心部で国会議事堂やチンギス・ハーン広場に隣接する国立中央文化センターにて開催されました。初めに，ナラン校長から創立以来の学校の歩みについての講演がありました。この 15 年間で新モンゴル高校が日本からの援助も受けながら大

きく発展してきたことが示されました。モンゴル語での講演ですが，日本語のスライドがスクリーンに映されました。続けて，モンゴル文部大臣や日本からの来賓の祝辞，ロータリークラブから図書の贈呈，教員の日の表彰と続きました。後半のプログラムは記念コンサートです。小学生から高校生までの生徒が，民族楽器演奏や民族舞踏，合唱，アカペラ，バンド，ダンスと全部で23ものプログラムを披露しました。演出・構成，舞台衣装など，すべて教職員や生徒の手作りのものだそうですが，学芸会とか文化祭出し物といったレベルを超えて，質が高く見ごたえがありました。最後に全員で校歌を斉唱して幕が下りました。

6．記念パーティー

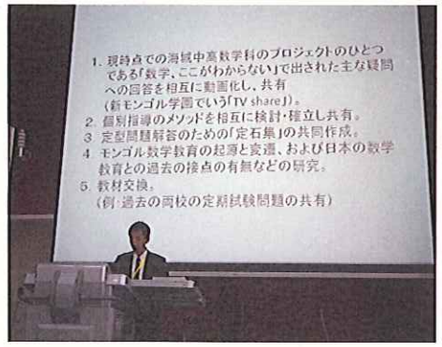
5日夜は，来賓，教職員，卒業生と総勢 500 人近い立食パーティーが開かれました。舞台ではスピーチ，表彰式，演奏が続く中，この日のために帰ってきた卒業生たちが先生や同級生との再開を喜び合っていました。会の終わりになると，ガラ理事長やナラン校長も加わって卒業生一同で校歌の大合唱となりました。校歌の歌詞には「未来への知育を極める／若い日々の勉学の原点／アジアの胸にともる炎／名声ある母校」との言葉があり，学校発展の躍動感にあふれていました。

7．第三回数学科合同会議

数学科科長のダシバット先生と短時間ですが数学科合同会議を持ちました。出来上がったばかりの共同論文にはモンゴル語に訳されていない部分も多くあるのですが，「数学科教員間で読み進めています」とのことでした。あらためて新モンゴルの先生方の教育に対する熱意に感心させられました。教材交換，定型問題解答のための定石集の共同作成のための具体的な作業等について意見交換をし，さっそく次の週から Skype による合同会議を継続して行っていくことを確認しました。

8．共同研究セミナー

6日 14 時 30 分から教育文化科学省において共同研究セミナーが開かれました。このセミナーは，新モンゴル学園がモンゴルの教育文化科学省，国立大学，ウランバートル市教育局，校長連盟等の行政・教育関係機関に，総合カリキュラム改革プロジェクトに対する提言を行うために開かれ，日本からは東北大学，名古屋大学教育学部附属中・高等学校，仙台城南高等学校，海城の４校が発表者として壇上に立ちました。日本の高等学校の学習指導要領，カリキュラム，学外活動の事例について発表が行われました。海城からは「日モの数学教育比較の一例～海城高校・新モンゴル高校両校数学科の共同研究を通して～」の演題で，数学科共同論文を基に発表しました。次期教育カリキュラム策定に必要な提言として役立つものになったとのことです。




9．帰国

モンゴル到着からずっと晴れて穏やかな日が続いていましたが，出発の朝は急に雪となり，氷点下近く気温が下がりました。朝早い出発でしたが多くの新モンゴルの先生方に見送られ，再会を期しながら帰国しました。〔平山裕之〕



## BCTJ 企画　中高生対象
## 2015年冬休み　ボルネオ島・スタディーツアーのお知らせ

都内の中高生と共にボルネオに出向き、現地の学生と交流をし、持続可能な社会についてディスカッションしませんか？　ボルネオに関するツアーのお知らせが学校に届きましたので、お知らせします。

今、地球規模で様々な環境問題への取り組みがなされています。しかし、日本で生活していると、自分たちの普段の生活が、地球環境とどのようにつながっているのかを実感することは困難です。

ボルネオ島は、アジア最大の熱帯雨林をもち、この熱帯雨林は、豊かな生物多様性を保持し、地球の二酸化炭素濃度に影響を与えています。しかし、現在では、多種多様な動植物の多様性が、大規模プランテーションの影響等により、失われようとしています。このプランテーション開発は、日本の日常にあるカップ麺、スナック菓子、チョコレート、アイスクリームや冷凍食品、さらには洗剤や化粧品などに利用されている植物油（パーム油）の大量生産が原因となっています。一方で、ボルネオ島では、植林活動や、環境教育活動など、様々な保全活動も実施されています。

地球の未来を創っていく中高生のみなさんに、地球環境の現状、保全活動への取り組みの現場、現地の同世代の生徒との交流を通じ、地球の未来を考えるきっかけをつくっていただきたいと思っています。これが一度に経験できる場所、それがボルネオ島にあります。まずは、説明会にご参加下さい。

### 冬休み・ボルネオスタディツアーについて

日　程：平成27年　12月26日（土）-12月31日（木）
費　用：約20万円
主な活動場所：ボルネオ島　サバ州　西部地区
主な活動：1. バタン・タラタック　リバークルーズ（テングザルや、野鳥の観察）
2. 現地学生との植林活動、現地の学生との交流会
3. プランテーション農場の見学
4. キパンディ・バタフライパーク（昆虫標本館、植物園）の見学、昆虫のナイトトラップ
企　画：ボルネオ保全トラストジャパン・サバ野生生物局
講　師：坪内　俊憲 ボルネオ保全トラスト理事長・星槎大学院大学准教授
問い合わせ：ボルネオ保全トラストジャパン　事務局　メールアドレス：　info@bctj.jp
問い合わせの際、学校名とお名前のご記入をお願いいたします。
活動（参考）：
①ボルネオ保全トラストジャパン　公式サイト「　http://www.bctj.jp/　」
②ボルネオ島に関するWWFの報告
「　http://www.wwf.or.jp/activities/2014/10/1228221.html　」

### 説明会について

日　程：平成27年11月7日（土）　14:00-17:00
会　場：都立両国高等学校
内　容：①スタディツアーの概要・背景　②ボルネオ保全トラストジャパンの取り組み
③スタディツアーの行程　④海外渡航に関する説明
⑤今後の、事前学習についての説明　⑥質疑応答
申し込み：申し込みの手続きは不要です。当日、保護者と一緒にご出席ください。

※ボルネオのスタディーツアーへ参加したい方は、グローバル教育部の関口（生物職員室にいます）まで来てください。詳しい日程などの資料を渡します。